



THE FRONTIER TIMES

[ザ・フロンティア・タイムズ]



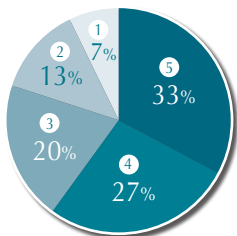
[世界を魅了するクール・ジャパン]

2012年7月、「日本再生戦略」が発表された。ここでは、現在の日本が直面している幾つもの困難を「フロンティア」、つまり、過去に誰も切り拓いたことのない未知の領域であると捉え、勇気を持って切り拓いていくことで世界に範を示す社会を築いていくことが「フロンティア国家」たる日本の責務である、としている。

「日本再生戦略」には38の重点施策が示されているが、中でも「クール・ジャパンの推進」という施策に注目したい。ここで言う「クール(Cool)」とは「冷たい」という意味ではなく、「洗練された」、「感じがいい」、「かっこいい」等の意味である。「クール・ジャパンの推進」とは、コンテンツ、デザイン、ファッション、伝統文化、観光、食、メディア芸術などの分野における世界に誇れる日本ブランドで世界を魅了しようという取り組みであり、英国のトニー・ブレア政権下で実施されたクール・ブリタニア(Cool Britannia)に想を得ている。これは英国が世界から持たれている「老大国、老朽化、衰退、失業、曇天、退屈」などのネガティブなイメージを一新させようとする国家ブランド戦略であり、この政策立案には若手研究員マーク・レナードによる「登録商標ブリテン(Britain™:Renewing Our Identity)」と題するレポートが強く影響を与えている。英国独自の新たな文化の創造や継承の担い手、またそれを広めるメディアなどを中心に、世界で最も“カッコいい”国を目指したのである。

ゆっくりと時間をかけて醸成された文化からにじみ出る風情や気質といった無形のもの、他国が真似出来るものではない。文化はその国の強みである。日本の未来を担う国際生たるもの、日本の文化や魅力を熟知して、その価値を心得ておくべきである。明確な日本のアイデンティティを確立し、世界にメッセージを発信する動きがもう始まっている。

■ 国際教育と英語コミュニケーションに関する意識調査(国際生対象)



Q. 日本には世界に向けて誇れるものがあると思う。

5: 全くその通りである 4: ややその通りである
3: ふつう 2: ややその通りでない 1: 全くその通りでない

Q. どのようなものが世界に向けて最も誇れますか。

高い技術力・ものづくりの知恵・「和」の伝統文化・寿司などの食文化・礼儀やマナー・思いやりや絆などの人間性・アニメなどのサブカルチャー・社会の秩序・治安・自動車・平和・歴史的建造物や自然などが挙げられた。

(有効回答 570 名 2012 年 12 月 3 日実施 FT 調査)

THE FRONTIER TIMES

Report

「貴重な経験を財産に、今後もステップアップしたい」

～11月14日(水) 模擬国連から～

国際的視野を磨く6年生の選択科目「Media English」で、1年間の学習の集大成として『模擬国連』が行われました。国際的な時事問題をテーマに、各国の代表者となった生徒たちがそれぞれの立場から考えた意見を英語で披露し、今年も活気溢れる会議となりました。

国際社会の課題について、
英語で意見を主張

「**個**人としてのスピーチは80点でしたが、皆と協力して作り上げた『模擬国連』の仕上がりは100点満点！ネイティブの先生からも『well done』『good work』と言葉をかけていただけて嬉しかったです。卒業前の最後の大会として臨んだ山中謙治君(中高一貫6年生)は、『模擬国連』を終えた感想を充実感あふれる笑顔でふり返ります。

国際社会が抱える課題に対し、各国の立場から考えた意見を英語で発表する『模擬国連』は、6年生の選択科目『Media English』の中で取り組む、独自の国際理解プログラム。国際生は1年間の授業を通して多角的な視野を磨き、国際社会に生きる資質を高め、最終目標として『模擬国連』で英語スピーチを披露します。毎年異なるテーマが与えられ、今年は「Climate Change(気候変動)」と「Illegal Animal Trade(野

生動物の違法取引)」を議題に活発なスピーチ発表が展開されました。

「6年間の学校生活で学んだことの、すべてを出し切りたい」という強い思いで取り組んだ近藤愛与さん(中高一貫6年生)は、「Climate Change」の会議にアメリカ代表として参加。「スピーチの自己採点は90点。たくさんの人の前に立って英語を話すことに緊張はありましたが、練習で何度も間違えていたフレーズを滑らかに話すことができ嬉しかったです」と満足げ。家庭での準備・練習を優しく見守り、当日は会場にも駆けつけてくれたお母さんからも「今までで一番良かったよ」と、声をかけてもらったそうです。✪



◀山中謙治君
「言葉の壁を恐れず
「自分の言葉」を伝えていきたい」

自分の言葉を人に伝える難しさ、大切さを実感

最終目標である11月の『模擬国連』に向けて、国際生は授業や自主学習を通して4月からコツコツと準備を重ねます。英語でのディスカッション、資料の収集、原稿作成、スピーチの練習など、発表までには乗り越えなければならぬ課題がたくさんあります。温暖化やオゾン層破壊をテーマに「Climate Change」を考える原稿を作った近藤さんが苦労したのは、「膨大な情報を一つひとつ検証・整理しながら、自分の主張をまとめていく作業」。自国の主張を効果的に表現できるよう、エネルギー消費量など数値データを効果的に盛り込みながら、時間をかけて何度も原稿を書き直したそうです。山中君は「『模擬国連』でのスピーチなので、個人的な意見ではなく国を代表した主張になるよう、たくさんの情報から本当に必要なものを見極めていく作業が大変でした」と話します。ブラジル代表として「Climate Change」について調べるなかで知った、毎年



◀近藤愛与さん
「将来は、国連にかかわる活動にたずさわりたいです。」



▲1年間の授業の総仕上げとして、また6年間の英語学習の集大成として臨んだ『模擬国連』の様子。

10%ずつ減少しているアマゾンの森林面積が日本の国土と同じだという事実は「主体的に考えてなければ気づかないこと」でした。

また、自分の担当する国のことを多角的に眺めることで「その国の政治や文化についても関心が持てるようになった」と変化も感じた2人。『模擬国連』につながる「Media English」の授業には、国際感覚を育てるさまざまな要素が詰まっています。

『模擬国連』での経験を通して、「自分の言葉を人に伝える難しさや大切さを知ることができた。今後もさらに上のステップへと躍進したい」（山中君）、「一つの国の立場からスピーチをするのはとても良い経験だった。将来は国連にかかわる活動をしたい」（近藤さん）と意欲を見せる2人。きっと今後も「Media English」で培った能力に磨きをかけて、世界で活躍する国際人に成長してくれるはずです。✦

Feature

10月17日に名古屋商科大学で開かれた「グローバル化時代の人材育成～新しい大学教育の方向性を求めて～」。世界に通用する人材の資質や、その育成法について活発な討論が行われたシンポジウムに本校からも10数名の生徒が参加しました。終了後にはパネリストのひとりである小川秀貴さんと話をする機会にも恵まれ、貴重な経験となりました。

世界に通用する グローバルな人材 を目指して

大学主催のシンポジウムに本校の生徒が参加

小川秀貴さん:まずは今回のシンポジウムに参加された経緯を教えてください。

坂本七海さん:もともと語学や国際社会で起きている問題について関心があり、先生から「こんなシンポジウムがあるよ」と勧められ、ぜひ参加したいと思いました。

吉田篤史君:僕は名古屋商科大学へ進学が決まっているので、大学でどのような勉強ができるのかを知りたくて参加しました。社会で求められている人材に

ついて、実際に企業の方から話を聞くことができる貴重な機会でもあったので、とても楽しみにしていました。

小川さん:シンポジウムでは「グローバルな人材」について、いろいろ立場の方から話を聞くことができたいと思います。印象に残った言葉や話がありましたか？

坂本さん:企業の方が仰っていた「ビジネスでは語学力だけでなく、人と人のかかわりやコミュニケーション能力が大事」という言葉が心に残りました。

多彩な経験と価値観を持った「グローバルな人材」に

吉田君:僕はパネリストの方たち同士のやりとりが興味深かったです。将来、国際社会で活躍するには、普段からどのような意識を持つようにすべきかなど、高校生の自分にもできる貴重な話を聞くことができて、とても参考になりました。

小川さん:お二人は海外留学の経験もあるそうですが、留学を経て何か変化はありますか？

坂本さん:以前は周りの意見に流されやすかったのですが、自分の考えをしっかりと主張できるようになりました。また、文化の違いに戸惑うことが多かったことで、日本の素晴らしさを再確認したり、家族や友人の大切さに気づくこともできました。

吉田君:自分の意見をしっかりと持つことの大切さを感じました。留学する以前の自分は、客観的な事実を自分の意見だと思ふ傾向があったのですが、留



▲吉田篤史君(中高一貫6年生)
来春からは名古屋商科大学
コミュニケーション学部に進学予定



▲企業の人事担当者や学校関係者のほか、学生や一般社会人などたくさんの方々が集まりました。

学を機にどんなことに対して「自分なりの意見を持つ」という意識が強くなったと感じています。

小川さん:シンポジウムでパネリストの方たちが仰っていた「アイデンティティの構築」や「異文化の理解度」というグローバル化時代の人材に求められる要素は、まさにそういった部分なのかもしれませんね。それ以外にも「外国語運用能力」や「セルフマネジメントスキル」などが挙がっていましたが、現時点での自分はグローバルな人材として、どの部分が足りないと感じましたか？

坂本さん:全部です(笑) 質疑応答の時間にも、大学生や大学院生の方が今の自分には想像もできない視点から質問されている姿を目の当たりにして圧倒されてしまいました。

小川さん:大学生や大学院生と比べたら無理ありません(笑)

坂本さん:ただ、とても良い刺激にもなりました。企業が採用の際に最も重要視することは、その人の経験や価値観だと知ることもでき、これまで以上に社会に対して関心を持って、いろいろなことにチャレンジしていきたいと思いました。

国際社会で活躍するために必要な「幅広い分野の知識」

小川さん:吉田君はどうですか？

吉田君:僕も坂本さんと同じで、まだまだ身につけなければならないことがばかりだ、というのが実感です。なかでも「アイデンティティの構築」に関する話はとても印象的でした。留学を通して自分の意見を持ち、それを主張することの大切さは理解しているつもりだったのですが、大学や企業の方の話を聞いて、グローバル化社会で求められる「アイデンティティの構築」は、もっと深く幅広いものなのだと感じました。

小川さん:今後自分が身につけなければならない能力がはっきりとしたという感覚ですか？

吉田君:はい。これまでの自分は「海外に行くこと＝グローバル」だと思っていましたが、自分の課題や進むべき方向性を確認する上で、とても良いきっかけになりました。

坂本さん:私もこれまで、いろいろな方から「海外で活躍するには語学力だけではダメ」というアドバイスをいただく機会がありましたが、なかなかその意味を実感できる機会がありませんでした。今回、大学や企業の方の話を直に聞くことで、その言葉の意味を少しだけ理解することができた気がします。

小川さん:ビジネスの社会では外国語が話せるだけでは、競争に勝ち残ることはできません。社会人の先輩として、そのことはお二人に伝えておきたいですね。

坂本さん:私は将来、日本独自の製品や文化を海外に伝える仕事をしたいと思っています、大学でもその夢を叶えるた



▲坂本七海さん(中高一貫6年生)
来春からは同志社大学政策学部に進学予定

めにいろいろなことを学びたいと思っています。実際に海外と日本の架け橋となって活躍されている小川さんから、これから私が考えておくべきことや、やらなければならないことについてアドバイスをいただきたいのですが。

小川さん:語学の勉強はもちろんですが、宗教の問題や文化などいろいろな分野の知識を蓄えておくとも良いですね。将来、起業することも考えているなら経営について学ばなければなりません。大学は4年間あるので、ボランティアで海外に行ったり、いろいろなことにチャレンジするべきだと思います。社会人になるとあまり時間に余裕はありませんし、後になって後悔しないためにも、学生時代にはやりたいと思ったことにどんどん挑戦してください。

「大学の4年間は、努力次第で2倍・3倍の経験にできる」

吉田君:僕は人と意見が対立した時の対処の仕方が苦手で、自分の主張を押しつけてしまうことで人間関係のトラブルになることがよくあります。円滑なコミュニケーションの取り方について、何かアドバイスをいただけませんか？

小川さん:お互いに意見を出し合うことがコミュニケーションであり、ビジネスの世界では主張が対立することばかりです。自分の意見はしっかり持ちながら、プラスアルファとして他人の考えも柔軟に取り入れるようにしていくと良いかもしれませんね。コミュニケーションの問題には正解がないけれど、決して相手を論破せず、「あの人と話すのは楽しい」、「吉田君の意見を聞いてみたい」と思わせることが大事だと思います。

吉田君:将来、国際社会で活躍するならば、文化や習慣の異なる人とのかわりが多くなるので、なおさら相手の心を理解しようとする姿勢は大切なのかもしれません。これからは、そういう意識で人と接していこうと思います。

小川さん:お二人は将来、世界を舞台に仕事をしたいということですが、これからの意気込みや大学での学びに対する期待を聞かせてください。

坂本さん:私がこれからの人生で大きなキーワードにしたいと考えているのは「異文化理解」。国や宗教が異なる人とも互いの価値観を理解し合い、自分の意見を主張できる人間になりたいと思っています。今はまだまだ知らないことばかりですが、大学でも留学などを通して世界に目を向け、いろいろなことを学びたいです。今回のシン

ポジウムは、それを決意できる良い機会になりました。

吉田君:僕の将来の目標は、音楽を媒介にして国と国をつなぐ仕事をする事。その目標に向かって、大学では一つひとつの講義を大切にして、コミュニケーションの面でもたくさんのことを吸収したいと思います。名古屋商科大学にはいろいろな留学制度もあるので、積極的に活用して世界を見て、意欲的にいろいろな能力を伸ばしていき、それぞれの国の人の立場から物事を考えられる「グローバルな人材」になれるよう、自分自身に期待しています。

小川さん:大学生活は4年間ですが、それを8年分、12年分の経験にできるかどうかは自分次第です。時間を有効に使っているいろいろな経験をしてください。



▲小川秀貴さん
シスメックス株式会社
経営企画本部経営企画部 担当課長
名古屋商科大学外国語学部
(現コミュニケーション学部)1期生



Great Dialogue from the
MOVIES ジョージ校長の映画名セリフ集

[Casablanca (1942)]

“Play it, Sam. Play "As Time Goes By"”

「あれを弾いて、サム。『時の過ぎ行くままに』を」

もしも典型的なアメリカ人に最も有名な史上最高のハリウッド映画は何かと聞いたら、彼らは口を揃えて「カサブランカ」と答えるでしょう。「カサブランカ」は、大恋愛の物語であり、戦時中の物語であり、フランスの植民地であるモロッコに住むリック・ブレイン（ハンフリー・ボガート）と困っている女性に目がなく、賄賂を受け取っているのに市民に人気のある警察官のルノー署長との感動的な友情の物語でもあります。リックは多くの秘密を抱えるミステリアスなバーの経営者です。彼は他人の為に自分を危険にさらすようなことをしない皮肉屋のふりをしています。しかし実際にはほとんどの従業員が、彼の保護の恩恵を受けていました。「カサブランカ」という映画はあらゆる点で優れています。完璧な演出、比類なきアンサンブルキャスト、気の利いた会話、何十年もの間観客を魅了してきたリアルな新鮮味とサスペンスなど全てを兼ね備えています。この映画はアカデミー賞で3つの賞を受賞しました。まさに宝といえる映画なのです。🎬

If you ask a typical American to name the most famous Hollywood film of all time, he or she will most likely name “Casablanca” (1942)—a great romance, a wartime drama and a stirring story of a friendship between Rick Blaine (Humphrey Bogart), an American in French-held Morocco, and Captain Renault (Claude Rains), a delightfully corrupt police officer who has a weakness for women in trouble. Rick is a mysterious owner of a bar who has a lot of secrets. Rick pretends to be a cynic who sticks his neck out for nobody. In fact, almost all of his employees are the beneficiaries of his protection. “Casablanca” has everything going for it—flawless direction, a peerless ensemble cast, clever dialogue and a real sense of freshness and suspense that has charmed audiences for decades. The movie won three Academy Awards. The film is, quite simply, a treasure. 🎬

ホ

第8回 定期演奏会 WIND ORCHESTRA

今

年も吹奏楽部Wind Orchestraの定期演奏会が開催されます。部員一人ひとりが懸命に練習を重ねてきた成果を発表する場で、1年間の活動のクライマックスです。クラシックの楽曲からポップスまで、幅広いステージをお楽しみください。

【日時】

2012年12月25日(火) 12:30 開場/13:00 開演

【場所】ウィルあいち 入場無料

地下鉄名城線「市役所」駅2番出口より東へ徒歩約10分

名鉄瀬戸線「東大手」駅南へ徒歩約8分 ※公共交通機関をご利用ください。

【曲目】

組曲「仮面舞踏会」より
(ハチャトリアン)

ホルン協奏曲第1番
(R.シュトラウス)

ホルンソロ:水無瀬一成
(京都市交響楽団副首席)

「千と千尋の神隠し」

ハイライト など





Intensive English in Edmonton, Canada

Sumika FUJIOKA (Japan)

Student in the Integrated Six-Year Program

On July 2nd, twelve students from Nagoya International Junior and Senior High School went to the University of Alberta in Edmonton, Canada in order to study English intensively. For me, it was the first time to study abroad and to live with a host family. I was very nervous at the beginning.

My homestay family was changed at the last moment. I was very lucky, though. The family that hosted me was great. They treated me just like a daughter. There were two children in my host family—a two-year-old boy and a girl who was only nine months old. Everybody in the family was very cheerful and friendly, so I was able to get to know them very quickly and naturally.

My homestay mother was particularly kind to me. She helped me out a lot and

took me to many interesting places. I especially remember a festival in Calgary that we attended. Calgary is famous for its cowboys. The festival that we attended was called “Stampede”. It’s focused on cowboys. Everybody was wearing cowboy hats. My host mother bought one for me. I still have it. It is my treasure. The festival was amazing. I will never forget it. I am extremely grateful to my host family for introducing me to “Stampede”.

We studied English at the University of Alberta Faculty of Extension. We were able to study with other learners of English from all over the world. The classes were divided according to English ability. Two teachers were in charge of the class to which I was assigned. Their method of teaching was very interesting and easy to understand. I got a lot out of that class. I also made a lot of friends from other countries. All in all, it was a terrific experience for me.

Although the time was short (only seven weeks), my stay in Edmonton really opened my eyes. I have a wider vision of the world than before I went. I can’t wait to see my host family again! 🇨🇦





Memories of New Zealand

Camylla SUZUKI (Japan)

Student in the Senior High School
International Studies Program

This past summer, I traveled with forty of my classmates to New Zealand. We all chose to enroll in the long course (two months). We studied English for two weeks at a language school and then attended one of nine local schools. The whole time, we lived with local families.

The days passed so quickly. I missed my family and friends in Japan, of course. On the other hand, I really wanted to stay in New Zealand. I had such a good experience making new friends. Also, my homestay family was very kind. I never did manage to go to the beaches, Sky Tower or the zoo. There just wasn't enough time for everything.

I loved the food in New Zealand. I liked the "lollies". That's kiwi for "candy". The best food there has to be fish and chips, though. It's not really very healthy, but it tastes great. I could eat it every day.

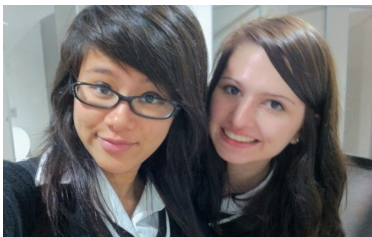
I was very surprised by how much



it rained. Of course, when we were there it was winter in New Zealand. I love the rain, so it was fine with me. Almost every time that it rained, I could see two or three rainbows. Sometimes I could see double rainbows. This is not something that you can easily experience in Japan. Also, I loved the New Zealand sky. The sky is overwhelmingly beautiful at night. There are lots of stars visible in the Southern hemisphere. The combination of extreme darkness and the bright stars is truly magical.

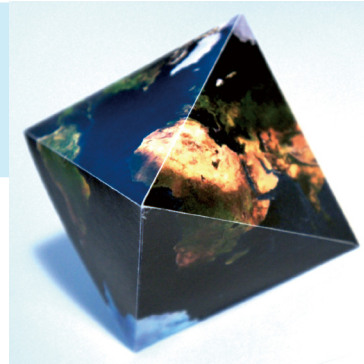
I went ice-skating three times. Kiwis are expert skaters, so I was a little embarrassed, because I am pretty bad at skating. Still I had a great time every time I went.

All in all, my experience in New Zealand was first-rate. I made some great friends and will treasure my memories of my two months there for the rest of my life. 🇳🇿



GLOBAL VISION

Who Are the Millennials?



Like individuals, generations have distinctive personalities and attributes. The Silent Generation (1928-1945), the Baby Boomers (1946-1964) and Generation X (1965-1980) were distinctive generations with distinctive value systems. Now come the Millennials, young adults born after 1980. They are confident, technology-savvy, liberal, tolerant, diverse, optimistic and open to change. They are also the first generation to come of age in the new millennium. They are on their way to becoming the most highly educated generation ever.

Fewer of these young adults are married than young adults in previous generations. Most of them regularly go online and have created profiles in social media sites. In fact, many of them choose to live with

their parents even after finishing college. Being a good parent is the greatest ambition for these young adults, even more important than having a good marriage. Very few of them want to have a high-paying career or to be famous. They are less religious than older adults, want to do community service and look to government to do more to solve large, intractable problems. They are less likely to serve in the military than young adults in previous generations.

Millennials do not cite “work ethic” as a distinctive attribute of their cohort. Instead, they cite their use of technology as something that sets them apart. Also, they are more tolerant of non-traditional families, believe that immigration makes a nation stronger and feel that, while

there is a generation gap between them and their parents' generation, it is benign, unlike the gap between the Baby Boomers and the Silent Generation in the turbulent 1960s.

Having flexible employment is important to the Millennial Generation. These young adults do not mind checking in with the office remotely all weekend, so long as their employers allow them some flexibility during the week.

Employers, concerned about high attrition among their youngest employees, have responded to the Millennials' concerns. Some companies donate a percentage of profits to fund volunteer work by their younger employees.

Authors William Strauss and Neil Howe have written many books about different generations. They claim that the Millennials are a "heroic" generation that is civic-minded and values teamwork, the very qualities that the modern crises our world faces now demand.

Not all people are enthusiastic about the millennial generation. Some think that these young people are lazy, lack emotional intelligence and do not take criticism very well. In addition, the latest gadgets seduce them. They themselves believe that they are misunderstood.

Some research from American universities might put things in perspective. The University of Michigan's Monitoring the Future research is interesting. Forty-five percent of Baby Boomers believe that wealth is a priority in life. Seventy-five percent of Millennials think so. Fifty percent of Baby Boomers feel that it is important to keep abreast of political affairs. Only thirty-five percent of Millennials think so.

Millennials are sometimes called the "Trophy Generation", a term that reflects competitive sports where mere participation is sufficient to earn a reward. For better or worse, these are the kids who are taking over the reins in our universe. The more we can understand them, the better. 🇯🇵

発行 **名古屋国際** 中学校
高等学校
NAGOYA INTERNATIONAL JUNIOR & SENIOR HIGH SCHOOL

所在地 〒466-0841 名古屋市昭和区広路本町 1-16

発行月 年間4回 (6月/9月/12月/3月)

制作 学校法人栗本学園
名古屋国際中学校・高等学校
学内広報チーム

デザイン cluch on cluch Co.,Ltd.

企画協力 株式会社 イーブレイン